

2019年10月号

いよいよ10月から無償化が始まりました！

秋は運動会、バザー、いろんな行事やバザーと保育園の子どもたち、保護者たちにとってとても忙しい季節だと思います。

そのような中、いよいよ10月から消費税が10%に増税され、幼児教育・保育の無償化が始まりました。今回の無償化に伴う保護者にとっての最大の変化は、「副食費」が実費徴収されたものです。市保連で把握している限りでも、「主食費」+「副食費」が、5000円～12,000円と園によってとても大きな差が開いています。これらは「材料費」とされていることから子どもたちの食べているものにこんなに大きな違いが生じていることに驚きです。

また、副食費を実費にするというのはお金の問題だけではありません。給食費が、保護者と園の関係の中で考えるべき問題とされてしまうことも不安が残ります。子どもたちが生きていく土台となる保育園の給食のあり方を考え直す必要があります。

保護者の声 (民間保育園保護者 鴨田香織)

給食は保育のひとつ

保育園では給食、おやつ、行事など、みんなで多くの食の時間を持ちます。わが家の長男は複数の食物アレルギーがあり、保育園入園当初は調味料から対応が必要だったため、一番心配なことが食事でした。入園すると保育園の先生方は“親だけでなんとかしなければと思わなくて大丈夫ですよ”という対応をしてくださって、気持ちがすごく軽くなりました。代替食と食事環境作り等の配慮により、保育園での食事は楽しい時間になりました。

また、同じクラスの子どもたちも長男のアレルギーについて自然に理解してくれて、「今日は僕も〇〇(長男)と一緒にのおかずが食べられた」と喜んでくれたことは本当にありがたかったです。アレルギーがあってもあたたかい給食を自分のために作ってもらえたこと、みんなと一緒にクッキングができたこと、そういった食を通した体と心の育ちを保育園で守ってもらった日々があり、小学生になった今も心から食事は楽しいと思えるようです。今後も保育園における給食がすべての子供にとって食べる喜びを実感できるものであってほしいです。

給食職員の声 (民間保育園給食職員 中川裕香)

無償化が始まってみて、まだ給食現場の実感としては大きく変わったことはありません。恥かしいことに私自身もまだ十分に理解できていないので問題がみえていないだけかもしれません。しかし、現段階でも確実に言えることは、無償化制度によって給食が保育と切り離されてしまう可能性があるということです。第一、保育料に給食費が含まれないという考え方が許せません。給食を食べられない・もしくは食べないという家庭がでてくるかもしれません。

給食費の個人負担は、みんなで食べる「共食」という大切な部分がないがしろにされているように思います。給食の中身も園によって大きな格差が生まれてしまうことになります。予算内で給食費が収まるのだろうか、これまで通りの給食の提供やクッキング保育ができなくなるかもしれない……。現場では不安の声しかあがりません。

私たちは安心して美味しい給食を届けることが使命だと思っています。お金のために食育の質を下げたくはありません。「よく遊び・食べ・寝る」給食も含めての保育を大切にしている私たちの思いをもっとみんなにも知ってもらいたいと思います。

他にも無償化に伴う問題はいろいろあります。朝鮮学校やインターナショナルスクールが、今回、無償化の対象外とされました。10月3日の代表者会議にも参加された朝鮮学校関係者の方が、寄稿してくださいました。10月17日付けの京都新聞にも関連する記事が掲載されています。

朝鮮学校の関係者の皆さんとは、これからも交流を深めながら意見交換していきたいと思えます。

「幼保無償化」制度からの外国人学校幼稚園除外について

金賢一(京都同胞生活総合センター所長)

安倍政権の肝いりで、5月17日に「子ども・子育て支援法」が公布され、10月1日から幼児教育・保育の無償化(以下、幼保無償化)がスタートした。

この制度、「すべての子どもが健やかに成長することを支援する」という理念の下、「3～5歳の幼児教育・保育の原則無償化」をうたっている。幼稚園、認可保育所、認定こども園はすべて無償、認可外保育施設も指導監督基準を満たしているところは無償化の対象となる。

ところが、朝鮮学校の幼稚園を初めとした各種学校認可を持つ外国人幼児教育施設はこの制度から除外となっている。

政府による除外の論理は、昨年12月28日の関係閣僚合意「幼児教育・高等教育無償化の制度の具体化に向けた方針」で明らかになった。それによると、「各種学校は、①幼児教育を含む個別の教育に関する基準はなく、多種多様な教育を行っており、②児童福祉法上、認可外保育施設にも該当しないため、無償化の対象とはならない」となっている。その結果、朝鮮学校幼稚園40校を初めとした各種学校の幼稚園88校が無償化から除外されることになったのである。

これほどひどい話もない。そもそも朝鮮学校幼稚園は各種学校認可を受け、幼児教育・保育を、半世紀以上にわたり行ってきたことは、文部科学省も地方自治体も認識していることである。

これは、「制度の不備」の問題ではなく、明らかな外国人学校差別である。おそらく各種学校だからというのは口実であり、実際は外国人学校、というより朝鮮学校を排除することに根本的な意図があったと考えざるを得ない。昨今の「高校無償化」制度からの朝鮮学校だけの排除(こちらは他の外国人学校は対象)、長年続いてきた朝鮮学校に対する補助金停止・削減の流れを見ると、どう考えてもそう思わざるを得ないのである。

朝鮮幼稚園では「幼稚園教育要領」に準じた教育を行っており、同時に朝鮮人としてのアイデンティティーを幼児期に自然に養うことができるよう、朝鮮語や朝鮮の歌などの文化に重きを置きながら教育・保育を行っている。

私たちは今回の不当な差別に反対し、適用を求めて断固として闘っていこうと思っている。多くの日本市民の協力をお願いしたい。

保育園数珠つなぎ

くりのみ保育園

くりのみ保育園は、1975年に伏見区小栗栖地域の住民の方たちの力で設立された保育園です。設立から50年近く、卒園児の子どもたちが園児となり、さらに、その子どもたちへと代を重ねていくほどの年月となりました。

それでも、設立当初から保育士として園を見守ってこられた方が、数年前まで園におられました。また、ご自身がくりのみ保育園の卒園児で、子どもが昨年度まで園児として通っておられた保護者の方も実際に存じ上げています。その方は、保護者会会長として、熱い思いで保育園のため尽力されていました。単に子どもを預ける場所というだけでなく、「保護者も関わりながら園と共に一緒に作り上げていく保育園でありたい」という思いは、途絶えずに引き継がれてきているように思います。

入園前に、初めて説明を聞きに行った時、「くりのみ保育園ではお勉強は一切ありません」というようなことを聞いた覚えがあります。何かといろいろ教えることを売りにしている園が多い中、衝撃的な言葉でした。園舎にはいった時には、昼間の保育時間中にも関わらず、誰彼となく子どもが寄ってきて、「だれ〜？」と聞くのです。見知らぬ顔に、好奇心たっぷりに目を輝かせ、のびのびとそこで暮らしている子どもたちがいたのです。

入園してみると—やっぱり—毎日ひたすら遊んでいました。運動会でも、生活発表会でも、訓練、統制などとはほど遠い、ぐだぐだな、とてもゆるい時間が流れます。しかし、そこで見せる、子どもたちひとりひとりのとびっきりの普段着の笑顔こそ、きっと、くりのみ保育園がずっと大切にしてきたもののように思います。

保護者会でも、夏祭り、子育て交流会、クリスマス会などを行っています。保護者の負担感を減らしつつ、充実したイベントなどを行うことを模索しているところです。保育園は、保護者も毎日のように通う場所です。子どもたちのためというのはもちろん、保護者にとっても、居心地のいい、楽しい場所になるようにとの思いを持って取り組んでいます。

保育園における保護者は、何年かすれば去っていく、通りすがりの者にすぎないかもしれません。しかし、子どもにとっては一生の基盤となる場所です。今通っている子どもたちが大人になって、子どもを持つことがあれば、「くりのみ保育園に通わせたい」と思ってくれるよう、くりのみ保育園が子どもたちの大切な思い出となり、この先の世代までも引き継がれていくことを願っています。(保護者会副会長 野村清治)



